

## 堀河百首題「神楽」をめぐる

内藤 愛子

『堀河百首』成立以前には、歌題としてあまり取り上げられていない歌題が数多くみられる冬部の歌題に注目し、各歌題の特徴について考察してみたい。今回は、「神楽」を取り上げて、この歌題を詠出歌人達がどのように捉え、詠じたかを具体的に検討を加え、堀河百首題「神楽」の特徴を明らかにしてみたい。

まず、堀河百首題「神楽」が成立する以前どのように詠じられていたかを見ることに拠って歌題化への変遷を辿ってみよう。

勅撰集の八代集において、神楽という歌題は『堀河百首』成立以前の勅撰集には見出せない。しかし、『古今集』では、第二十巻に神遊びの歌という部立が独立し、そこには十三首(1074～1079)あり、採物歌六首、日女歌一首、返物歌六首がある。

『後撰集』では、冬部に一首(457)に題しらず、読人しらずの歌として

457 千早振る神垣山の神葉は時雨に色も変らざりけり

とあり、冬の主題配列から、「時雨」、「紅葉」と捉えられ、『古今集』の神遊歌(1074)を前提にした詠歌である。

1074 神垣の御室の山の神葉は神の御前に茂りあひにけり

『拾遺集』において、神楽の主題の歌は、冬部になく、『古今集』と同様に第十巻に神楽歌という部立が独立している。その部立には

神楽歌十一首(576～586)と神祇歌で構成され、神楽歌十一首は採物歌八首、大前張二首日靈歌一首で、『古今集』神遊び歌を踏まえた構成になっている。

次に、『後拾遺集』では、第二十巻雑六に神祇の部立があり、神祇信仰関係の歌の部立であり、神楽歌や神楽を歌題とした歌は見出せない。

だが、神楽と同様の発想に拠った詠歌(1171)が見出せる。

大原野祭の上卿にてまいりて侍りけるに、雪のところどころ消えけるに見てよみ侍りける 治部卿伊房

1171 さかき葉に降る白雪は消えぬめり神の心はいまやとくらん

『堀河百首』成立以前の勅撰集において、神楽は、冬季の部立の主題、歌題として見えず、『古今集』以来神遊び歌、神楽歌、神祇という独立した部立があり、その中で神楽歌という歌群の形成がみられるのみである。

だが、『堀河百首』成立以降の勅撰集である『金葉集』においては、第四巻の冬部に神楽を歌題とした歌が二首(294・295)みえる。

家経朝臣の桂の障子の絵に、神楽したる所をよめる

康資王母

294 さかきばや立舞ふ袖の追い風になびかぬ神はあらじとぞ思ふ

神楽の心をよめる

皇后宮権大夫師時

295 かみがきの三室の山に霜ふればゆふしでかけぬ神葉ぞなき

だが、『詞花集』には、独立した部立や神楽の歌題もなく、『千載集』、『新古今集』には各々神祇の部立が設けられ、神楽、神遊びを歌題とした歌の配列がみられる。

このように、『堀河百首』成立以降の八代集において、『金葉集』のみ、冬部立に歌題として神楽の配列がみられるのは注目させられる。それは、撰者である源俊頼が神祇の部立を作らず、神楽を冬季の歌題として捉えており、撰者の編集意図の一端を看取できるであろう。だが、『金葉集』、『詞花集』以外の勅撰集『千載集』や『新古今集』において、神楽は神祇の部立の歌題として定着がみられる。それは、『古今集』以来の伝統に基づいて、あくまでも独立した部立があり、歌題としても見出され、で冬季の年中行事の歌題とされていないことが知られる。

次に、神楽は、屏風歌の画料に取り上げられており、屏風歌における神楽についてみてみよう。

まず、初期の屏風歌の代表歌人である紀貫之の『貫之集』（『私家集大成中古Ⅰ』57）を取り上げ、神楽の屏風歌を抽出してみると次のようである。

神楽の屏風歌は、「神楽」（19・531）、「神楽せるところ」（187）、「なつかくら」（473）の四首である。その四首の季節に拠って分けてみると、夏季が一首（473）で残りは冬季の屏風歌である。次の一首は、

なつかくら

473 行水のうへにはへる河やしろかは浪たかくあそふなるかな

夏神楽屏風の歌であり、『俊頼髓脳』に、この歌を引いて「水の上に神の社をいはひて夏は神楽するなり」とし、夏の神楽が行われていたことを指摘している。

また、屏風歌において夏の神楽を扱った歌として『たゝ見』（『私家集大成中古Ⅰ』74）に一首（38）があり、夏越の神楽を詠じている。

みつのほとりにかくらする

38 みなかみのこ、らななかれてゆくみつにいと、なこしのかくらする  
そする

貫之の473の歌も、夏越の祓の時の神楽と捉えられ、『貫之集』（11・406）に「みなつきはらへ」と「夏祓へ」の屏風歌が見出せる。

みなつきはらへ

11 みそきする河のせみれはから衣ひもゆふくれに波ぞ立ける

なつのほらへ

406 河やしろしのにをりはへほす衣いかにほせはかなぬかひさらん  
このように、屏風歌の画料として「夏の神楽」が取り挙げられ、夏越の祓の時に神楽を行っていたことが知られる。

その他三首（19・187・531）は、冬季の神楽の詠歌である。

十一月かくら

19 をく霜に色もかはらぬ神はにかをやは人のとめてきつらん

かくらせるところ

187 足引の山のさか木るときはなるかけにさかゆる神のきねかも

かくら

531 神葉のときははなればなかけくに命たもてる神のきね哉  
これら三首は、いずれも神楽歌（『古今集』1074・1075）を発想の基とし、神葉の常葉に常盤に懸けている。

1074 神垣の御室の山の神葉の御前に茂りあひにけり

1075 霜八たび置けと枯せぬ榊葉の立ち栄ゆべき神の巫覡かも

その三首のうち、一首(19)は、天理図書館蔵の『貫之集』(『私家集大成中古Ⅰ』58)において、「十一月神祭」とされている。また、屏風歌に「十一月神祭」という画料があり、『貫之集』242に「山ざとに神まつる」とあることから、この歌は、月次の屏風歌であることから冬季の神祭であるとも考えられるであろう。

山里に神まつる

242 神まつる時にしなれば榊葉のときは影はかはらさりけり

「神祭」の屏風歌の発想は、「神楽」と類似し、榊葉に常盤を懸けた発想で、初句に「神まつる」とし、相違を明確にしている。

このように、屏風歌において「神楽」と「神祭」は発想や詠法が類似しており、その相違は、屏風絵によるところが大きかったように思われる。また、「神楽」と「神祭」はいずれも、夏季、冬季の画料にみられ、「神楽」の画料が冬季との季節の限定はされていないことが知られる。

次に、定数歌をみてみよう。初期百首歌である『好忠百首』、『順百首』(『私家集大成中古Ⅰ』105)の冬の歌十首中に次の二首(405・517)がある。

405 神まつるふゆはなかはにけりあねこかねやにさかさきおり  
しき

517 神まつるさかさきはさすになりけりゆふつくよにそおほぬさに  
見し

405の詠歌の二句目に「冬のなかば」とあることから十一月の神祭と捉えられる。前掲の貫之の歌(242)と同様に初句の「神まつる」、「榊葉」と詠まれ、「神祭」の歌と捉えられる。また、この二首は、『古今和歌六帖』の「神祭」に分類されている。「神祭」は、歳時部

の夏に分類がみられ、冬季の神祭の歌であるこの二首は、卯月の神祭と混合されており、「神祭」は夏の主題として分類されている。

また、『恵慶百首』(『私家集大成中古Ⅰ』104)の冬の十首のうち、

232 しもかれやならのひらはをやひらてにさすといそけるかみのみ  
やつこ

とあり、やはりこの詠歌は、「やひらて」、「神の御奴」という神事に関わる歌語から「神祭」か「神楽」を主題とした歌と解されよう。

冬季の「神祭」の歌と前掲の貫之の神楽の屏風歌(19・187・531)と歌としての明確な質的な相違はつけ難いと言えよう。

このように、初期百首歌の冬季十首の中に「神祭」の歌が含まれていることは、既にご指摘されているように屏風歌に歌材を仰いだ新しい歌材とされている。<sup>(1)</sup>しかも「神祭」は、夏季の歌材としてでなく、冬季の歌材として捉えていたことが知られる。

だが、同じ定数歌である『相模百首』(『私家集大成中古Ⅱ』29)には、

477 庭火たく神楽のにはのいちしるくわか榊葉のさしはやさなむ

とあり、『相模百首』の十一月に神楽の詠歌が見出される。神楽は冬季の歌材とし、神楽を主題として詠じられている。この歌が定数歌における神楽の主題とした初出歌と言えるであろう。また、その歌には、神楽という歌語が詠み入れられ、神楽に関連する庭火、榊葉という歌語を用いて神楽の活気あるにぎやかさを詠じている。

『相模百首』において、初夏に「神祭」を主題とした歌がみえ、初期百首歌のように冬季の主題としての「神祭」はなく、中冬に「豊の明」や「神楽」を詠じ、同じ主題の重複を避けたと推察も可能であろう。

このように、定数歌において初期百首歌には神楽の主題は散見さ

れないが『相模百首』において冬季の主題とされている。

次に、堀河百首題と共通項目が多く見られる『古今和歌六帖』には、第一帖の歳時の冬に「かぐら」の項目があり、十二首が配列されている。その六首は貫之の詠歌であり、五首は神楽歌で、伊勢の屏風歌一首である。貫之の六首はいずれも屏風歌で、そのうちの二首(216・217)は「夏越の祓」と「夏神楽」で、一首(221)は「臨時祭」、その他は「神楽」である。

このように、『古今和歌六帖』における「神楽」は、屏風歌と神楽歌であり、季節の関わりなく「神楽」とし、第一帖歳時の冬に分類されている。また、前掲の「神祭」と同様に、主題は季節に拠る分類がなされているがそこに配されている歌は、夏、冬季の区別なく主題に拠ってまとめられている。このことから、少なくとも「神楽」は冬の主題と意識されていたことが知られる。

歌合において、神楽が歌題として初出は、永承四年十二月一日庚申六条齋院禊子内親王歌合である。歌題は、神楽・雪・氷・歳暮・待春であり、冬季の歌題の歌合である。

ちなみに、『堀河百首』成立以前で神楽の歌題のある歌合を『平安朝歌合大成』に拠って列挙してみると、承暦四年十月二日庚申篤子内親王家侍所歌合、永保三年十月齋宮媞子内親王歌合、寛治五年十月十三日従二位親子草子合、承徳元年東塔東谷歌合である。

これらの歌合は、いずれも神楽を冬季の歌題としている。神楽が冬季の歌題として定着するに当たって、宮中、および伊勢神宮・賀茂神社等で行われる御神楽は十一、十二月であることから冬季の歌題とされたと考えられるであろう。殊に、宮庭式楽として大成した内侍所御神楽の成立(長保四年五月とも寛弘二年十二月とも言われ

ている。)の影響は無視できないであろう。これらのことから、歌合における神楽の歌題の初出は、内侍所御神楽の成立以降ということから、冬季という季節の歌題として定着したと考えられるであろう。しかも、歌題としての神楽の初出は永承四年(1049)であることから、比較的新しい歌題と捉えられるであろう。

このように、『堀河百首』成立以前の神楽をみると、勅撰集においては歌題として見出せず、『古今集』以来、神あそび、神楽歌、神祇という独立した部立が成され、その中に神楽歌の配されている。

だが、屏風歌では画料として神楽が夏・冬季にあり、季節の限定はみられない。初期百首での神楽は主題とされず神祭が冬季の主題とされている。内侍所御神楽の成立以降に成された『相模百首』には、冬季の主題として神楽がみられる。

歌合においても神楽の歌題の初出が新しく、内侍所御神楽成立以降であることから、当初から冬季の歌題とされていたことが知られる。

このように、『堀河百首』歌題の選考に際して、神楽が勅撰集のように神祇の歌題としてでなく、『相模百首』や歌合のように冬季の季節歌題と意識していたことは確かであろう。

『堀河百首』の「神楽」十六首の歌語についてみると、神楽歌や『古今集』、『拾遺集』の神あそび歌、神楽歌を基にした歌語が多く、神葉、霜のように『古今集』以来詠み続けられた歌語のほか、庭火、白和幣、木綿等のように神楽に関する歌語に拠っている。これらの歌語の組み合わせに拠った詠歌が多く、十六首における歌語の組み合わせをみると、霜、神葉に拠る歌は四首(1042・1045・1051・1052)で、雪、神葉に拠る歌は一首(1056)である。神と庭火に拠

る歌は四首(1041・1044・1046・1047)で、これらの歌語の組み合わせに拠る歌が半数以上を締めている。

また、十六首中に榊及び榊葉のみが詠まれた歌が六首、庭火のみが詠まれた歌が五首、榊葉と庭火の両方共に詠み込んだ歌が二首あり、神楽の十六首の歌は、同致の歌語に拠る歌が多数を締めていることが判る。

だが、十六首中、榊葉及び榊や庭火のいずれも詠じていない歌は次の三首(1048・1049・1050)である。

1048 韓神に袖ふる程はとのもりのともの宮つこみび白くたけ

1049 ゆふかけていはふ社の神楽にも猶朝倉のおもしろきかな

1050 しらにぎてたくさの枝に取りかさねうたへばあくる天の岩門

これら三首を歌語及び詠法をみてみよう。まず、源俊頼の歌(1048)

をみると、三、四句目「主殿の伴造」は、『拾遺集』<sup>1055</sup>の歌を意識した歌と言える。この歌は『俊頼髓脳』において、例歌に引かれ、少なからず関心のある歌であることが知られる。

1055 主殿のとものみやつこ心あらばこの春ばかりあさぎよめすな

また、『神楽歌次第』に「主殿寮主殿寮二度即ち主殿寮「唯」と称す。仰せて云はく「御火白く献れ」とあり、神楽の次第の「御火白く献れ」を意識して詠み入れたとも考えられ、いずれにしても新しい表現と言えよう。

俊頼の歌は、『拾遺集』<sup>1055</sup>を意識し、「御火白くたけ」という神楽の言葉を取り入れるという俊頼独自の創作意図が窺える。

また、俊頼の歌以降、「主殿の伴造」、「御火白く」が詠じられていることから題詠歌や百首歌に影響を与えていることは確かに認められる。

源師時の歌(1049)の五句目「おもしろきかな」は、『拾遺集』<sup>586</sup>の神楽歌に拠る表現と考えられる。

586 しなが鳥猪名のふし原とびわたる鴨がはねおとおもしろきかな  
神楽の歌題で「面白し」を詠み入れた歌としては寛治五年十月十

三日従二位親子草子合30や承德元年東塔東谷歌合23に見出される。

30 霜ふれる庭火の松の笛の音はおもしろくこそなりまさるかな

23 榊葉に雪ふる時の御神楽は面白き増すものにぞありける

この歌合歌23と同様に雪降る神楽の興趣を詠じた歌として『堀河百首』の河内の歌(1056)が挙げられる。

1056 賢木とる庭火のまへにふる雪をおもしろしとや神もみららん

この歌は、「面白し」の白しに雪の縁語「白し」を懸け技巧的に仕上げている。

また、『夫木抄』に「天仁二年十一月顕季家歌合の神楽」という

詞書の藤原保俊の歌に

7490 天の戸をほそめにあけてみそなはず庭火の影のおもしろきかな

とあり、五句目の「おもしろきかな」は、『拾遺集』<sup>586</sup>に拠るのではなく、師時の歌(1049)を前提にした歌を捉えられるであろう。

このように、神楽に「面白し」、「面白きかな」等を詠じることは、『拾遺集』の神楽歌に表現を求めている。また、『堀河百首』詠出歌人達の詠歌活動の時期において、「面白し」、「面白きかな」はよく詠まれ、注視された発想と言えよう。また、『堀河百首』以降の百首歌や題詠歌に例がみられ、神楽の詠出方法として定着化の傾向が見取れるだろう。

藤原顕仲の歌(1050)の「しらぎて」、「たくさ」は、『古事記』『日本書紀』の天の岩屋戸の話に「下枝に白丹寸手(しらにきて)、青丹寸手(あをにきて)」を取り垂でて」と「天の香山の小竹葉を水草に結びて」とあり、『古事記』に典拠を求めた歌語である。それは、五句目「天の岩門」との関連からの歌語の使用であろう。

「しらにきて」は、管見の範囲では例歌が見られない。だが、

「たぐさ」は『万葉集』<sup>1946</sup>や『患慶法師集』<sup>213</sup>（『新編国歌大観』第三卷）の百首歌、春に見出せる。<sup>2)</sup>

<sup>1946</sup> 霍公鳥 鳴音聞哉 宇能花万 開落岳尔 田草引嬬婦  
<sup>213</sup> たぐさとるは、そもうへしもえぬればしつのみすすらもおりたち  
にけり

「たぐさ」は、歌例が少なく、『記紀』『万葉集』に出典を求めた歌語と言える。

藤原顕仲の歌は、天の岩屋戸の神事に発想や歌語を求めた特徴的な詠歌と言えよう。

以上のように、これら三首（1048・1049・1050）は、神楽の言葉や今まで出典とされなかつた神楽歌の歌語や『記紀』の天の岩屋戸の神事に典拠を求めた歌語に拠る詠歌である。いずれも歌語や表現の工夫が認められ、特徴的な歌と言えるであろう。

次に、神楽題の十六首において類型的な発想や表現についてみてみよう。

神楽の歌十六首のうち、天の岩屋戸を詠じたのは三首（1043・1047・1050）である。

<sup>1043</sup> 神とりゆふしてあそふ冬の夜は天の岩戸もあけぬへきかな

<sup>1047</sup> 庭火にたく天の岩戸の神わさはあめたちからを猶そうれしき

<sup>1050</sup> しらにきてたくさの枝に取りかさねうたへはあくる天の岩門

この三首はいずれも神楽の起源である天の岩屋戸の神事を発想の基にしている。天の岩戸の神事を歌材として『万葉集』から詠じられ、神楽の歌題の詠歌としては、承德元年東塔東谷歌合に

<sup>21</sup> これやこの天の岩戸を押しひらき荒ぶる神もなごむ御神楽  
とあり、神楽に拠って天の岩戸が開いたという岩屋戸の神事を詠じている。前掲の三首も同様の発想に拠るが、殊に仲実の歌（1047）は、

天の岩屋戸の神事に関連する天手力男に焦点をあて、独自の工夫が

成されている。

また、初撰二度本系の橋本公夏卿筆本『金葉和歌集』に  
神楽の心をよめる  
藤原致時

<sup>377</sup> 朝倉のこゑこそ空にきこえけれあまの岩戸を今やあく覧

とあり、前掲の『金葉集』<sup>295</sup>の後に配されている。天の岩戸が神楽に拠って開くとされている。しかも、歌謡神楽歌名「朝倉」が詠み入れてあり、『堀河百首』における神楽の詠法と同様の特徴がみられ、『同百首』詠出の同時期の歌と推察できるのである。

このように、神楽を天の岩屋戸の神事の発想に拠る歌は、『堀河百首』詠出当時における神楽の詠法のパターンの一つとして捉えられるであろう。また、『堀河百首』以降においても神楽の歌例を挙げられることから詠法の定着する傾向が看守されるであろう。

神楽という、神前での舞楽と共に唱和するということを具体的に詠じている歌が七首（1042・1048・1049・1050・1053・1054・1055）あり、その七首のうち、1050・1054・1055の三首は

<sup>1050</sup> しらにきてたくさの枝に取りかさねうたへはあくる天の岩門

<sup>1054</sup> 神はやとときはの枝にゆふしてて心とけてもあそふなるかな

<sup>1055</sup> さかさき葉にゆふしてかけて諸人のときはのみもあそふへきかな

いずれも、具体的に白和幣の付いた手草をもつてうたう姿（1050）や木綿四手の付いた神を持って舞う心得が詠じられている。殊に、肥後の歌（1054）と紀伊の歌（1055）は、『拾遺集』<sup>576</sup>を証歌とし「神楽」「常盤」「木綿四手」「あそぶ」と一致する歌語が多く、同様な発想に拠った歌であることからこの二首は、類型的な歌というよりは類似歌として認めてもよいように思える。また、この二首は神楽の舞楽に視点をあてた詠歌である。

<sup>576</sup> 神葉にゆふしてかけて誰か世にか神の御前斎ひそめけん  
次の四首（1042・1048・1049・1053）は

1042 暁のほしさへさえぬ袖はの霜うちほらふ袖のかさふり

1048 からかみに袖ふる程はとのもりのとも宮つこみひ白くたけ

1049 ゆふかけていはふ社の神楽にも猶朝くらのおもしろきかな

1053 ひろまへの庭火の光あきらけくかなづる袖を見るそ嬉しき

「袖のかさふり」、「袖ふる」、「かなづる袖」のように神楽を舞う袖

に視点を置いた詠歌(1042・1048・1053)と歌謡の神楽歌「明星」、「韓神」、

「朝倉」という神楽歌名が詠み入れた歌(1042・1048・1049)である。

神楽の舞楽に視点を置き、舞う袖の動きに拠る神楽の歌は、管見

の範囲において「堀河百首」以前の例歌を見出すことができず、新し

い詠法と言えらる。だが、『康資王母家集』128(『私家集大成中

古Ⅱ』・『金葉集』294)に、「立舞ふ袖」とあり、神楽を舞う袖

の動きを序詞とした歌が見出される。

128 さか木はや立まふ袖の追風になひかぬ神もあらしとそおもふ

このように、神楽を舞う袖に拠る詠法が「堀河百首」の歌とその

百首の詠出歌人達と交流のある歌人の詠歌に見られることは、『堀

河百首』詠出時期の新しい詠法と認められよう。また、『堀河百首』

成立以降の題詠や百首歌に「袖ふる」というような舞う袖に拠る詠

法の例歌が多く見出せることから詠法の定着が窺える。

歌謡の神楽歌名を詠み入れた三首のうち、まず「朝倉」は取り上

げてみよう。この源師時の歌(1049)以前に「朝倉」を詠み入れた歌

例は数多く挙げられるが、神楽の題詠歌に「朝倉」を詠み入れた

歌例は挙げられない。本来歌謡の神楽歌「朝倉」として詠じた歌は

管見の範囲において源師時の歌が初出であろう。だが、この詠歌以

降は、百首歌や題詠歌に「朝倉」を詠じた歌例があり、この歌の影

響と考えられよう。

次に、大江匡房の歌(1042)の「暁の星」は、歌謡の神楽歌「明ア

カ星ホシ」に意識した歌語であろう。「暁の星」詠じた歌例は、管

見の範囲でこの歌以前に見出せず、大江匡房独自の歌語と推察され

る。だが、「暁の星」もこの詠歌以降の百首歌に歌例が挙げられ、そ

れらはこの歌の影響に拠る歌と捉えられるであろう。

「韓神」を詠じたのは源俊頼の歌である。「韓神」に歌謡の神楽

名「韓神」を懸け技巧的に仕上げている。「韓神」は、やはり管見

の範囲ではこの詠歌以前に歌例は見えず、源俊頼の新奇な歌語と言

えるが、『散木奇歌集』1551(『私家集大成中古Ⅱ』62・『千載集』1175)

の隠題の歌に

からかみのかたき

1557 よととも心をかけてたのめともわれからかみのかたきしるし

か

とあり、「韓神」に「唐紙」「型木」「難き」を懸けて技巧的な歌で

ある。殊に、俊頼にとつて「韓神」は新奇で興味のある歌語と捉え

ていたのだろう。

『夫木抄』に拠ると、冬部三の「神楽」に「天仁二年十一月修理

大夫顕季歌合、神楽」に

7491 ゆふてぐら手にとり飾る韓神は三輪をよこてにすすめつるかな

とある。これは隆源法師の詠歌であるが、俊頼の歌(1048)の影響さ

れた歌と捉えられる。また、「韓神」は『堀河百首』詠出歌人達に

注目された歌語とも推察できるであろう。

また、「韓神」もこの詠歌以降の百首歌に歌例がみられ、源俊頼

の歌に拠った歌と言えらるであろう。

このように、神楽の題詠歌や百首歌に、具体的に神楽歌名「朝倉」

や「韓神」又は「明星」に拠る「暁の星」を入る表現は、『堀河百

首』以前の例歌にみられず、新趣向の表現と言えらる。また、

この三首以降には、百首歌や題詠歌に歌例が挙げられ、それらは神

楽の詠法の一つとして定着化がみられる。

歌題「神楽」の十六首のうち、類似歌として藤原顕季の歌(1045)と永縁の歌(1052)が挙げられる。

1045夜もすがら取る榊葉におく霜のとけざらめやは神の心も

1052庭火には取る榊葉におく霜もとけやしぬらん神の心も

この二首の類似については、既に竹下豊氏が指摘されているように、初句が違い、四句目が多少違うのみで、残りはほとんど一致している。また、1045の歌は、寛治五年十月十三日従二位親王子草子合に

29夜もすがらたけるにはびのおく霜のとけざらめやは神の心も

とあり、この歌は作者名が記されていないが、顕季の歌ではないかとも推察し、その歌の二句目を変えただけで、『堀河百首』に出しているとしている。

だが、前掲の『後拾遺集』1171に

1171さかき葉に降る白雪は消えぬめり神の心はいまやとくらん

とあり、神祇の部立の歌である。1045・1052の歌とは、「榊葉」「神の心」「とく」と一致し、「とく」を「溶く」と「解く」を懸詞とするならば共通点が多くみられ、参考にしたとも推察できるであろう。

藤原顕季の歌と永縁の歌は類似歌であり、しかも『後拾遺集』1171を参考歌として挙げられるであろう。

見立てという技巧に拠った歌として、公実の歌(1041)と基俊の歌(1051)が挙げられる。

1041あまとつる神の心をとるけふや庭火のけふり雲とみゆらん

1051夜を寒みとる榊葉におく霜をしらゆふ花と人やみるらん

1041は庭火の煙を雲に見立て、1051は榊葉に置く霜を白木綿花に見立てという表現技法に拠っている。霜や庭火という伝統的な歌語を技巧的に処理することは詠法の工夫の一つとして受け取れよう。

1051のように、榊葉と霜を木綿四手に連想する歌例として前掲の『金葉集』295の皇后宮権大夫師時の歌が挙げられる。

295かみがきの三室の山に霜ふればゆふしでかけぬ榊葉ぞなき

初雪の白色から木綿四手を連想する歌例はあるが、霜を白木綿花と連想する歌例は見出せない。

白木綿花は、『堀河百首』以前において『万葉集』(914・1111・1740)に見られるのみである。

914山高み白木綿花に落ちたぎつ滝の河内は見れど飽かぬかも

1111泊瀬川白木綿花に落ちたぎつ瀬をさやけみと見に来し我れを

174山高み白木綿花に落ちたぎつ菜摘の川門見れど飽かぬかも

この三首は、いずれも水の落ちたぎつ様子の比喩的な表現として白木綿花を詠じている。白木綿花が詠じた歌は、管見の範囲では万葉歌のみであることから、『万葉集』に典拠を求めた歌語と言えるであろう。だが、『散木奇歌集』1292に『万葉集』914と同様に滝のたぎつ様子の比喩として用いられている。

1292吉野川いはるせきをわきかへり白木綿花やたきの玉水

このように、白木綿花は『万葉集』を典拠とした歌語であり、『堀河百首』詠出歌人達には関心をもたれた歌語であることが知られる。また、基俊の歌(1051)は白木綿花を水のたぎつ様子の比喩ではなく、榊葉に置く霜を見立てるという技巧的な新しさが看取される。

歌題「神楽」の詠歌において、この二首以前に見立てという技巧に拠る詠法は見られず、『同百首』における新趣向の詠法の一つと捉えられるであろう。

このように、歌題「神楽」において類型的発想や詠法や類似歌がみられる。特に、類型的な発想や詠法は神楽の起源である天の岩屋戸の神事を基にした発想や神楽の舞楽に視点を置いた詠法や技巧的

な詠法がある。そのうち殊に、舞の袖の動きを表現したり、歌謡の神楽歌名を技巧的に詠み入れたり、また、見立てという技巧に拠る詠法は、いずれも『堀河百首』詠出歌人達の新趣向と言えるであろう。以上のことから、『堀河百首』における神楽の詠歌の特徴は、神楽歌に歌語を求めながら類型的な発想や詠法に拠る歌や技巧に拠る歌と類似歌が挙げられる。それらは、神楽歌の歌語であり、榊葉の縁語である常盤という伝統的な発想を主とせず、神楽を具体的に捉えて詠じており、『永久百首』において榊という歌題がみえることから、神楽を主とした歌題として意識していたことが判るであろう。このように、神楽は歌題として新しいことから詠出に当たって歌人達は、神楽歌や『記紀』を発想の基とし、そこに新しい歌語を求めたり、『榊葉』や『霜』等の伝統的な歌語を用いながら様々な表現や詠法の創意工夫が必要であらうことは想像に難くないだろう。また、堀河百首題「神楽」の特徴として類型的な発想や詠法と類型歌が挙げられるのは、『堀河百首』詠出に際して、既に先学のご指摘のように、お互いに影響し合うような場の存在が考えられるであろう。そしてそれは、新しい歌題である神楽を詠出する折に、新しい歌語や趣向を組み合わせや新趣向を凝らしながら積極的に新しい和歌表現を求めようとする歌人達の共通する意識から生まれたことは間違いないであろう。

〈注〉

- (1) 松本真奈美氏「曾根好忠『毎月集』について——屏風歌受容を中心に——」(『国語と国文学』平3・9)、金子英世氏「『源順百首』の特質と初期百首の展開」(『三田国文学』第19号、平5・12)

(2) 『万葉集』1946ほととぎす鳴く声聞くや卯の花の咲き散る岡に葛引く娘女とあり、万葉仮名では田草とあるが活字本では葛となつてゐる。『惠慶集』203(『私家集大成中古1』104) 203たくはとるえこそむへしもえぬれはたこのますらをおりたちにけりとあり、上二句の相違がみられる。

(3) 同歌は、初度本『金葉集』430にあり、『続詞花集』364で作者名が藤原政時とある。

(4) 竹下豊氏「『堀河百首』成立事情とその性格——堀河百首研究(1)——」(『女子大國文 国文篇』第36号、昭61・3)

(5) (4)に同じ。

本文に引用した『万葉集』、『古今和歌六帖』、『堀河百首』勅撰集は『新編国歌大観』(歌番号も同本に拠る)に拠る。ただし、表記については改めたところがある。